

海外派遣留学プログラム 留学中報告書

所属：国際教養学部

学年：2年

留学先大学：ヨークセントジョン大学

現在の学期：Semester 2

時間割：

曜日	履修科目名・時間等
月	14:00~16:00 The romantic Imagination: Affect, excess and revolution - Lecture
火	9:00~11:30 Conflicting Words - Workshop 14:30~16:00 From slavery to freedom -Lecture
水	9:00~10:30 From slavery to freedom -Seminar
木	9:00~10:30 The romantic Imagination: Affect, excess and revolution - Lecture
金	
土・日	

履修科目や近況について

得も言われぬ美しい街です。ここではいつも鐘が鳴っています。1400年前からヨークに
昼も夜もなく響いてきた鐘です。頭に垂れ下がってきそうな曇り空さえ、侘しい風情で
す。地震のない国へ嫉妬する理由のひとつがはっきりとしました。1000年以上の記憶を
内包する建築物が、いまだ生きて、息をするように鐘を鳴らしているからです。街そのも
のが中世の遺産で、そこここに歴史と物語をきくことができます。ただ歩くだけではるか
過去と現在を行き来しているような、不思議な感覚です。

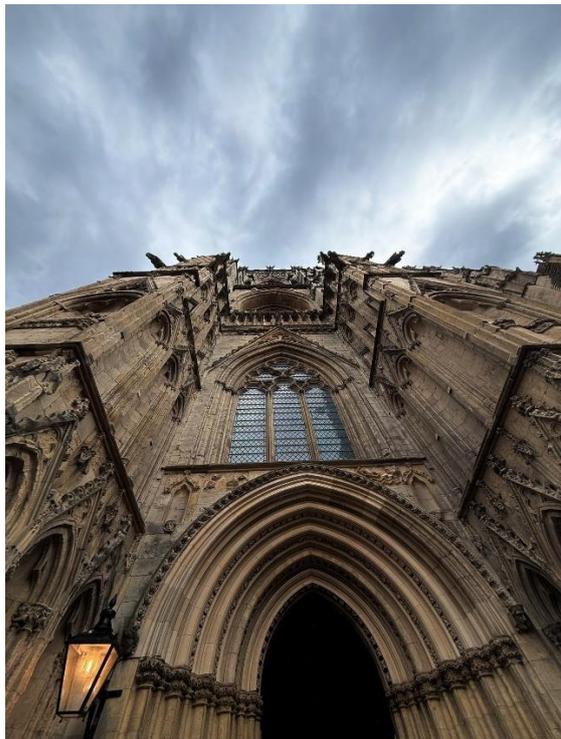


治安は極めて良く、平和の体現といえるでしょう。安全を日本の専売特許のように考えていた自分を恥じました。信号を除き、東京よりまったく秩序が保たれていると感じます。また、恐らく留学を考えている方が最も知りたいであろう夜散歩についてですが、喜んでください、日が沈んでからも散歩できます。街灯が蜂蜜のように路地を濡らして、映画の中を散歩している気分になれます。



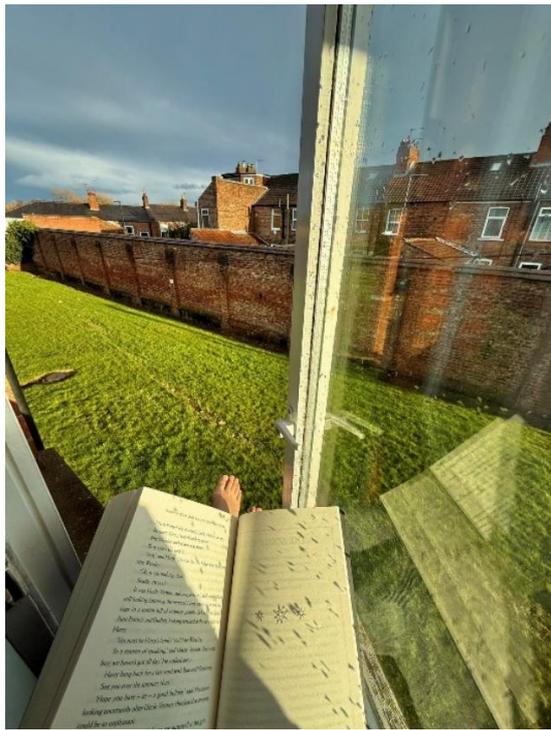
ヨークの人々は非常に優しく、皮肉なジョークが好きで、おだやかな笑顔と裏腹に強烈なブラックジョークを得意とします。いまだ、笑いどころが分からず、十八番の愛想笑いで誤魔化しています。

授業はすべて少人数制で、毎回己の英語力の不足を痛感させられます。授業資料でわからない単語をつぶしていく、毎講義指定の本を一冊読みきる、読んでも読んでも果てのない論文と闘う、セミナーでのディスカッショントピックを予測して、ある程度の原稿を準備していくなど、無限の予習が必要とされます。クラスに日本人どころか留学生が一人もない状態で周りについていくのには相当に骨が折れますが、むしろ楽しんでいきます。



ヨークに点在する 30 弱の書店にはすべて足を運びました。嬉しいことにすべてインディペンデント書店で、版元がそのまま経営している書店もあります。ぜひ書店のオーナーさんに、好きな作家や作品について話しかけてみてください。魅力的な方ばかりです。また、非常に心苦しいのですが、ヨークで最も素敵な書店を決めさせていただくとしたら、1 位は The Minster Gate Bookshop になります。必ず足を運んでください。

バイキングの歴史にちなんだ祭りや文学イベントも数多く開催されており、York Literature Festival はヨークセントジョン大学も共催なので、パネルディスカッションやトークイベントなど、もれなく参加するつもりでいます。



寮ではこんな風にして本を読んでいます。左の写真は、物語が幸せな結末を迎えると同時ににわかに空が晴れあがって、濡れ輝く芝生が拍手するようにはためき、感極まって泣いたときのもので。自然こそ何よりの劇場です。写真だと危険そうに見えますが、落ちませんので、大丈夫（落ちて二階なので問題ありません）。

右の写真は、寮の近くにある妖精の散歩道です。川辺の樹のはざまに妖精の家、交番、店などが身をひそめており、樹にかけられた「蜘蛛が私をくすぐる」「静かに、妖精が起きちゃう」などの遊び心ある看板もロマンチックで、私は Morrison というスーパーへ買い出しに行くとき、ここへ寄って散歩するのが大好きです。散歩だけして買い出しを忘れ、帰ることもあります。



寮では4人と共同生活しています。スラング多用、アクセントの癖から、そびえたつ言語の壁を感じ、仲良くなるきっかけとして、自室のドアに自己紹介ポスターを作成して貼りました。連絡先のQRコードも載せておけば、話すとっかかりになります。フラットメイトはみな優しくて気さくなのですが、私の隣に住む方は毎晩のように自室でパーティーしており、一体いつ心を休めているのか、やや心配になります。私には出来ない芸当です。



右の写真は Shambles の一角です。店員さんに「今日は何で来たの?」と聞かれたので、「もちろん箒で! さっきそこに駐車させてもらったよ」と答えました。



帰国するころ、自分がどのような人間になっているのか楽しみです。すっかり変わってしまっていると良いな、と思います。親には感謝してもしきれません。